



♪手まり

冬ごもり 春さりくれば 飯乞ふと
 草の庵を 立ち出でて 里にい行けば
 玉鉢の 道のちまたに 子どもらが
 今を春べと 手まりつく 一二三四五六七
 汝がつけば 我はうたひ 我がつけば
 汝はうたひ つきて歌ひて 霞立つ
 長き春日を 暮らしつるかも
 霞立つ長き春日を子供らと
 手まりつきつつ今日も暮らしつ
 この里に手まりつきつつ子どもらと
 遊ぶ春日は 暮れずともよし

*

長歌は、「待望の春になったので、托鉢のため村里におりてくると、子どもたちが集まって手まりをついて遊んでいる。自分も思わず仲間に加わって春の一日を過ごしてしまった」という意味である。

越後の冬は長い。だからこそ、春の到来とともに百花が一時に咲き乱れる。そんな春を迎えた喜びがこの歌の背景にある。似たような思いを詠んだものとして、

飯乞ふと我が来しかども春の野に
 すみれ摘みつつ時を經にけり
 といった歌も残されており、北国の人々の、春に対する思いを想像するがまず大切だ。

そんな喜びをさらに高めるものとして、閉ざされた家々から表に出て、手まりに興じる子どもたちの姿が点描されている。良寛の手まり好きは有名で、このテーマの彼の多くの歌の題材となっている。托鉢に出かけながらも、結局は無為に過ごすことになった一日に対する後悔は感じられず、むしろ長い春のこの日でさえ短く感じられるではないかといっ

た彼の思いが感じられるようだ

しかし、ここで止まってはいけない。今、春の日を遊びながら一心に手まりをついているこの子どもたちは、いったいどんな子どもたちなのだろう？ 厳しい自然の中で育つこの地方の子どもたちは、おそらく日常的に手まりなどついているゆとりはない。貧しい生活の中で、家の手伝いに追い立てられ、凶作の年には売られていく子どももいるはずなのである。そのような過酷な境遇の中で、今このひととき、春の訪れを楽しむように子どもたちは手まりに熱中しているのである。

良寛は、そんな子どもたちの生活を知っている。知っているからこそ、このわずかの幸せの時間を共有する。二つ目の反歌の「暮れずともよし」には、そんな思いもこもっているに違いない。

*

1758年、越後国出雲崎（現在の新潟県三島郡出雲崎村）で生まれた良寛は、18歳で曹洞宗に入山、諸国行脚の後帰郷、その清高な人柄は人々から敬仰された。詩作や書道にも才能を発揮した。

*

歌唱の際には、春を迎え、子どもたちと過ごす喜びを表現するとともに、その背景にある自然の美しさ・厳しさ、そして、生きることの喜びや辛さといったものにも思いをいたしてみたらどうだろう。声高にテーマを語るのではなく、日々の営みを暖かく正確な視線で捉えた良寛の思いを、ぜひ、客席に届けたいものである。